

— 茨城県土浦市 —

堂後遺跡

—— 太陽光発電設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2021

土 浦 市 教 育 委 員 会

— 茨城県土浦市 —

堂後遺跡

—— 太陽光発電設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

2021

土 浦 市 教 育 委 員 会

序

土浦市は、霞ヶ浦や桜川といった水源に恵まれ、古くから人々の暮らしが営まれてきました。そのため、市内には貝塚や古墳など数多くの遺跡が立地しています。これらの遺跡は、昔の生活や文化を現代の私たちに伝えてくれる貴重な遺産といえます。このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの重要な任務であり、郷土の発展のためにも大切なことです。

この度、烏山三丁目において太陽光発電設備工事が計画され、工事予定地内に所在する堂後遺跡の発掘調査が行われました。本書が、土浦市の歴史・文化の究明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し心から厚く御礼を申し上げます。

令和3年3月

土浦市教育委員会
教育長 井坂 隆

例言

1. 本書は、茨城県土浦市烏山三丁目1894番地2外における、アンフィニ株式会社が計画する太陽光発電設備工事に伴う堂後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、事業者の委託を受け、有限会社日考研茨城(代表取締役小川和博)が発掘調査支援を行い、土浦市教育委員会が直管で行った。
3. 発掘調査は主任調査員を亀井翼(上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員)が務め、小屋亮太(嘱託職員、現会計年度任用職員)が補佐した。
4. 整理作業は、調査終了後の令和元年12月から令和3年3月まで実施した。報告書は小屋が奈良・平安時代の遺物を、それ以外の執筆と編集を亀井が行った。
6. 本遺跡調査に関係する資料は、すべて上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて保管している。なお遺物の記録や整理、保管に際して、「KD1」の略称を使用している。
7. 発掘調査から報告書刊行に至るまで、次の方々および諸機関からご助言・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。(敬称略 五十音順)。

アンフィニ株式会社、茨城県教育委員会総務企画部文化課

凡例

1. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。
竪穴建物：S I 土坑：SK 攪乱：K ビット：P
2. 遺構・遺物の実測図中の表記は以下の通りである。
紙面・付着物 
3. 遺構・遺物の記述は以下を原則とした。
 - (1) 水系レベルは海拔高度(m)を示す。
 - (2) 遺物番号は本文・挿図・写真図版とも一致する。
 - (3) 遺構全体図は任意の縮尺で、各遺構の実測図は1/60、遺物実測図は1/2、1/3、1/4の縮尺で掲載してスケールで表示した。
 - (4) 遺構の「主軸」は原則カマドあるいは炉を通る軸線とし、主軸方向はその他の遺構の長軸(径)方向とともに、座標北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。
 - (5) 遺物の観察表の法量は、A：口径、B：底径、C：器高、()が現存値、[]が復元値を表す。胎土の表記は肉眼観察の結果確認できた銘物を記した。
 - (6) 土層や遺物の色調は、「新版標準土色帖」(小川正忠・竹原秀雄編著 2002 日本色研事業株式会社)を使用した

目次

序

例言

凡例

目次 挿図目次 表目次 写真図版目次

第1章 調査経緯と経過	1
第2章 環境	2
第3章 遺構と遺物	6
第4章 まとめ	23
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 土浦市周辺の地形	3	第7図 第1号竪穴建物出土遺物 (2)	10
第2図 堂後遺跡周辺の遺跡	3	第8図 第1号竪穴建物出土遺物 (3)	11
第3図 調査区配置図	7	第9図 第1号竪穴建物出土遺物 (4)	12
第4図 第1号竪穴建物 (1)	8	第10図 第1号竪穴建物出土遺物 (5)	13
第5図 第1号竪穴建物 (2)	9	第11図 第1号竪穴建物遺物出土状況	14
第6図 第1号竪穴建物出土遺物 (1)	9		

表目次

第1表 堂後遺跡周辺遺跡一覧表	5	第5表 堂後遺跡出土遺物観察表 (4)	19
第2表 堂後遺跡出土遺物観察表 (1)	16	第6表 堂後遺跡出土遺物観察表 (5)	20
第3表 堂後遺跡出土遺物観察表 (2)	17	第7表 堂後遺跡出土遺物観察表 (6)	21
第4表 堂後遺跡出土遺物観察表 (3)	18	第8表 堂後遺跡出土遺物観察表 (7)	22

写真図版目次

PL 1 第1号竪穴建物・東西セクション西側 南から・東西セクション東側 南から	
PL 2 南北セクション南側 東から・南北セクション北側 東から・南北セクションカマド部分	
PL 3 カマド完掘状況・遺物出土状況 (30) 北から・遺物出土状況 (77,78,80) 北西から	
PL 4 第1号竪穴建物出土遺物 (1)	
PL 5 第1号竪穴建物出土遺物 (2)	
PL 6 第1号竪穴建物出土遺物 (3)	

第1章 調査に至る経緯と経過

本調査はアンフィニ株式会社が計画、実施する太陽光発電設備工事に伴うものである。平成30年8月1日、事業者より土浦市教育委員会（以下市教委）に当事業予定地における埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。事業予定地が周知の遺跡である堂後遺跡（市遺跡番号203-036）に一部該当することから、事業地と市教委の間で協議を行い、試掘確認調査を実施することで合意した。8月29日に試掘確認調査を実施したところ、奈良・平安時代の堅穴建物を中心とした埋蔵文化財が発見された。これを受けてただちに事業者と協議を行ったところ、工法はスクリュウ杭であり、現地の削平等は伴わないものの、伐根は実施することであった。このため、伐根する樹木周辺の必要最低限の部分について発掘調査を行う必要がある旨を伝えた。令和元年8月、事業者と協議を行い、その結果、事業者の協力のもと発掘調査を行うことで合意した。

文化財保護法第93条に基づく届出は、令和元年8月22日付土教委発956号にて茨城県教育庁総務企画部文化課（以下県教委）に進達し、9月25日付文第1848号にて、伐根による影響が及ぶ範囲について発掘調査を実施するように通知がなされた。また、発掘区が既存の遺跡範囲の外であったため、遺跡範囲の拡大を行った。

調査は有限会社日考研茨城の支援を受けて市教委が実施することとなり、令和元年10月31日に市教委・アンフィニ株式会社・有限会社日考研茨城の間で埋蔵文化財の保存に関して協議同意した事項を協定書として締結した。同日、事業者と有限会社日考研茨城との間で発掘調査委託業務契約が結ばれるとともに、市教委と有限会社日考研茨城との間で発掘調査の具体的な実施に関わる覚書を締結した。

発掘調査は令和元年11月8日から開始し、文化財保護法第99条に基づいて、11月13日付土教委発1302号により県教委に発掘調査の報告を行った。調査は11月30日まで行い、12月3日付土教委発第1381号により発掘調査終了の確認を依頼した。県教委は12月19日付文第2750号に手調査終了を確認した。埋蔵物発見届は12月3日付で土浦警察署に提出し、令和2年1月27日付文第3109号によって文化財と認定された。整理作業は令和元年12月から実施した。

第2章 環境

第1節 地理的環境

堂後遺跡は、茨城県土浦市烏山三丁目地内に所在する（第1図）。土浦市は茨城県南部に位置し、土浦入りで霞ヶ浦に接している。市域の地形は台地と低地に大きく分けられ、台地は市内中央を流れる桜川低地を境として、北に新治台地、南に筑波稲敷台地が分布している。堂後遺跡は花室川右岸、北東に延びる谷を南に臨む筑波稲敷台地上に立地し、標高は約26mである。

遺跡の立地する筑波稲敷台地は、下総層群を基盤とし、その上に武蔵野ローム層、立川ローム層に相当する新規関東ローム層が堆積している（宇野沢ほか1988）。下総層群は下位から地蔵堂層、敷層、上岩橋層、木下層、常総層に区分されている。これらは、海と陸の環境を繰り返していたことを反映して、陸成の砂礫層と海成の砂や泥の繰り返しによって構成されている。そのうち最も新しい海成層である木下層は、主に浅海成の砂からなり、12～13万年前、関東平野が古東京湾と呼ばれる海域であったところに堆積した。海水準の低下に伴い淡水環境になると、氾濫原に常総層が堆積した。常総層では当時の堆積環境を反映して、河道には礫や砂が、後背湿地には泥が堆積している。

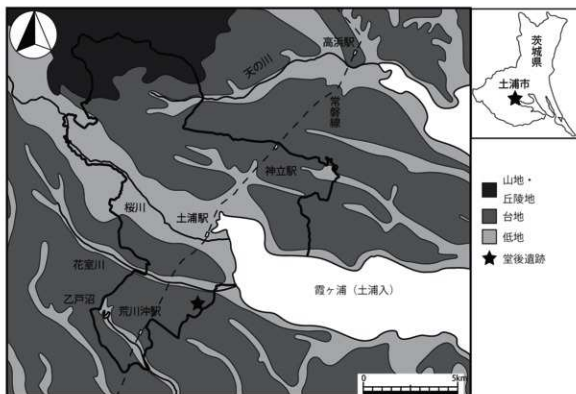
土浦市内の台地上において、遺構、遺物が発見される可能性があるのは新規関東ローム層以浅の地層である。新規関東ローム層は富士・箱根起源の降下火山灰が風化したものであり、約6万年前から1万年前に、陸地化した台地に堆積したとされる（宇野沢ほか1988）。岩相は明褐色～褐明の砂混じりシルト層～粘土質シルト層であり、後述の黒土よりも細粒で粘性が高い印象を受ける。ローム層から現在の地表までを覆うのが、暗褐色～黒褐色を呈する土壤（黒土）である。岩相は砂質泥～砂質シルト層であり、これは風成塵などの堆積と土壤生成作用が同時に起こって形成された堆積土壤（三浦1995）と考えられる。多くの場合耕作地として利用されており、地表面近くは人力または機械によって攪乱されている。堂後遺跡では関東ローム層上面から現地表面までの黒土の層厚は50～70cm程度であった。現況は放棄された栗畑であり、伐根対象となる樹木のほか、過去に伐採され腐朽した栗の切り株が多数認められた。

第2節 歴史的環境

堂後遺跡（1）周辺では、烏山団地の造成や国道125号線、県道24号線改良工事に伴って発掘調査が行われている。本節ではそれらの成果を中心に歴史的環境を概観する（第2図）。

旧石器時代では、形部遺跡（30）においてガラス質黒色安山岩製の剥片や、トロトロ石製の石核が出土している。

縄文時代草創期の遺物としては、念代遺跡（21）で神子柴型石斧と槍先型尖頭器、剥片が出土している。早期では、形部遺跡において早期中葉の沈線文系土器が土坑から出土しているほか、内路地台遺跡（28）において早期後葉（条痕文系土器）の灰穴が検出されている。前期では、ハイガイを主体としハマグリ、アカニシなどで構成される烏山貝塚（6）が形成

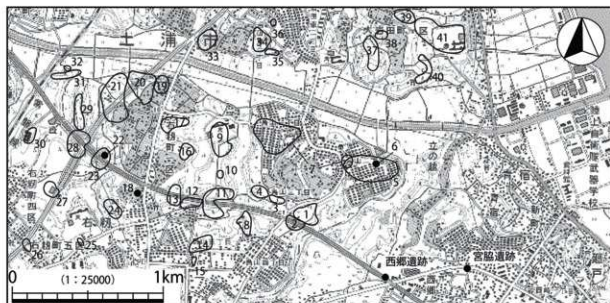


第1図 土浦市周辺の地形
(20万分の1 土地分類基本調査「茨城」をトレース、改変)

されており、関山～黒浜式期に位置づけられる。右羽貝塚東遺跡(26)では黒浜式期の、形部遺跡では浮島式期の堅穴建物が検出されている。一方、中期以降の遺構は堂後遺跡周辺では確認されていない。なお、花室川の対岸に位置する五蔵遺跡(41)では落とし穴群が検出されている。

弥生時代では、烏山遺跡(7)で後期の堅穴建物4件、中根遺跡(27)において後期の堅穴建物1軒が検出されている。

古墳時代では、堂後遺跡に隣接する南丘遺跡(2)で前期、後期の集落が形成されている。烏山遺跡(7)は古墳時代前期から平安時代まで続く集落跡であり、古墳時代前期の玉作り工房跡が検出されている。緑色凝灰岩製管玉、メノウ製勾玉、滑石製管玉・勾玉の荒割から仕上げまでのすべての段階の未成品、工具等が出土しており特筆される。中根遺跡では前期、永峰遺跡(9)では後期、平坪(20)遺跡では前期と後期末、形部遺跡では中期末～後期、神出遺跡(34)では前期と後期の堅穴建物がまとまって検出されている。古墳としては、花室川左岸に円墳6基からなる中内山古墳群(39)、円墳2基の法泉寺古墳群(40)が存在するほか、五蔵遺跡第1次調査では墳丘が削平された古墳が3基検出されている。1号墳、2号墳は6世紀初頭に位置づけられ、3号墳は時期不明なものの中期の可能性がある。右岸では、終末期の石倉山古墳群(5)が特筆される。前方後円墳1基、円墳4基、方墳4基からなり、すべて終末期に位置づけられる。方墳である1号墳、2号墳には周溝から埋葬施設へと延びる羨道が認められる一方、9号墳には羨道はなく、堅穴式で前室と玄室をもつ、いわゆる石棺系石室である。同様の石室は市内上坂田に所在する武者塚古墳1号墳にも認められ、終末期古墳を



第2図 堂後遺跡周辺の遺跡(国土地理院発行2万5千分の1地形図「土浦」使用)

特徴づけている。

奈良・平安時代には、堂後遺跡周辺は常陸国信太郡中家郷にあたると考えられている。南丘遺跡、烏山遺跡で前代に引き続き集落が形成されており、烏山遺跡では帯金具や灰釉陶器の小瓶が出土している。長峰遺跡や平坪遺跡、念代遺跡でも当該期の集落が形成されており、念代遺跡では「中家」や「太部」という墨書土器が出土している。内路地台遺跡では10世紀代の堅穴建物に加え、9世紀代の火葬墓も検出されている。神出遺跡では平安時代の堅穴建物22軒が検出されており、細片であるが灰釉陶器も出土している。隣接する東出遺跡(36)、中居遺跡(35)においても当該期の堅穴建物が検出されているほか、阿見町西郷遺跡は古墳時代後期から奈良・平安時代に継続する集落跡である。同町宮脇遺跡ではおよそ南北160～180mとなる溝の内側から、礎石建物跡や掘立柱建物跡が見つかった。踏脚硯が出土していることから、郡衙に関わる公的な施設があったと考えられている。これらの遺跡は、土浦市下高津から大岩田を通り、阿見に向かう古代東海道駅路推定地にも近い。

中世では、宮塚遺跡(13)、念代遺跡で地下式坑が検出されている。神出遺跡においては掘立柱建物、テラス状遺構、方形堅穴遺構、地下式坑、火葬墓などが検出されている。輸入陶磁器が出土しているほか、根石をもつ掘立柱建物が存在しており、有力者の居館を中心とした集落が形成されていたことがうかがえる。隣接する東出遺跡においても、火葬墓と粘土張り土坑が検出されている。また、「土浦市史」によれば右初館跡(23)は小田氏治の家臣、塚原内記の居館、岩田館跡(38)は信太市滅亡の際に活躍した岩田彦六の館といわれている。

近世では、右初館内に右初三区庚申塚(22)などが残されている。近現代の遺跡としては、数光遺跡(12)で航空機の退避壕の可能性がある土坑が検出されている。また現在の土浦第三高等学校の所在地(五蔵遺跡)には、昭和18年に海軍航空要員研究所が建設され、パイロットの採用試験と適性検査が行われていた。五蔵遺跡の発掘調査では当時の地下壕が調査されており、細かい部品まで分解された検査器械がまとまって廃棄された様相から、終戦時の状況を伺い知ることができる。

第1表 堂後遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡番号※	遺跡名	時代
1	36	堂後遺跡	旧石器・縄文・古墳・奈良平安
2	66	南丘遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
3	35	北平北遺跡	奈良平安
4	34	北平南遺跡	縄文・奈良平安
5	74	石倉山古墳群	古墳
6	73	烏山貝塚	縄文
7	76	烏山遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良平安
8	33	小西遺跡	縄文・奈良平安
9	27	永峰遺跡	古墳
10	475	長峰北遺跡	縄文・古墳・中世
11	65	長峰遺跡	縄文・奈良平安
12	64	数光遺跡	縄文・奈良平安・中世
13	63	宮塚遺跡	中世・近世
14	31	烏山A遺跡	奈良平安
15	32	烏山B遺跡	奈良平安
16	28	松原遺跡	縄文・奈良平安
17	29	堂地塚遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
18	80	右粉浅間神社塚	近世
19	30	沖の台遺跡	古墳・奈良平安
20	26	平坪遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世・近世
21	25	念代遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世
22	22	右粉三区庚申塚	近世
23	62	右粉館跡	中世
24	21	小谷遺跡	奈良平安
25	20	右粉宮塚遺跡	縄文
26	19	右粉貝塚東遺跡	縄文・近世
27	69	中根遺跡	弥生・古墳・中世
28	23	内路地台遺跡	縄文・奈良平安
29	24	牧の内遺跡	奈良平安・中世
30	469	形部遺跡	旧石器・縄文・古墳
31	59	右粉十三塚	近世
32	75	塚田遺跡	奈良平安・中世
33	148	南古屋敷館跡	中世
34	111	神出遺跡	縄文・古墳・奈良平安・中世
35	154	中居遺跡	奈良平安・中世
36	153	東出遺跡	古墳・奈良平安・中世
37	175	西の前遺跡	古墳・奈良平安・中世・近世
38	147	岩田館跡	中世
39	112	中内山古墳群	古墳
40	114	法泉寺古墳群	古墳
41	113	五蔵遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良平安

※土浦市遺跡地図での番号

第3章 調査成果

第1節 調査の方法

調査区は、試掘確認調査の成果に基づき、伐根対象となる2本の樹木（A、B）の影響を受ける範囲とした（第3図）。樹木Aの周囲（1区）は7×7m、樹木Bの周囲（2区）は6×6mとし、重機によって遺構確認面である関東ローム層上面まで表土除去を行った。2区については、検出された遺構は伐根の影響を受けないと判断し、保存することとなった。一方、1区では検出された遺構が大きかったため、遺構の輪郭が取まる約10×10m程度まで調査区を拡張した。遺構覆土の掘削は移植こてで行い、遺構、遺物の記録は平面直角座標系に基づきトータルステーションで行った。

第2節 発見された遺構と遺物

調査の結果、奈良時代の堅穴建物跡1軒を検出した。

第1号堅穴建物（SI-1、第4、5図）

主軸 N-125°-E

規模 1辺8×8m程度の正方形を呈する。

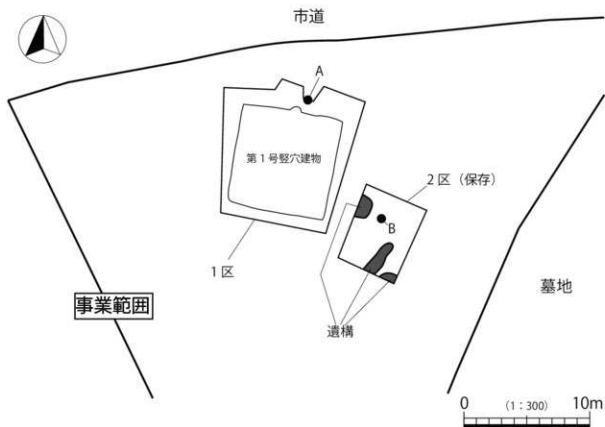
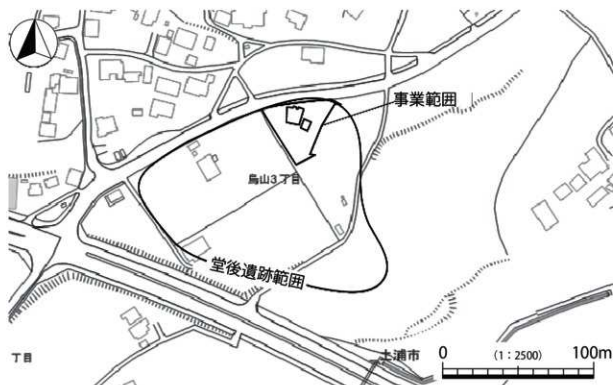
壁 確認面からの深さ30～40cm程度を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。北辺を除く3辺に、幅20cm、深さ10cm程度の幅広い壁溝がめぐる。

床 平坦でよく硬化している。

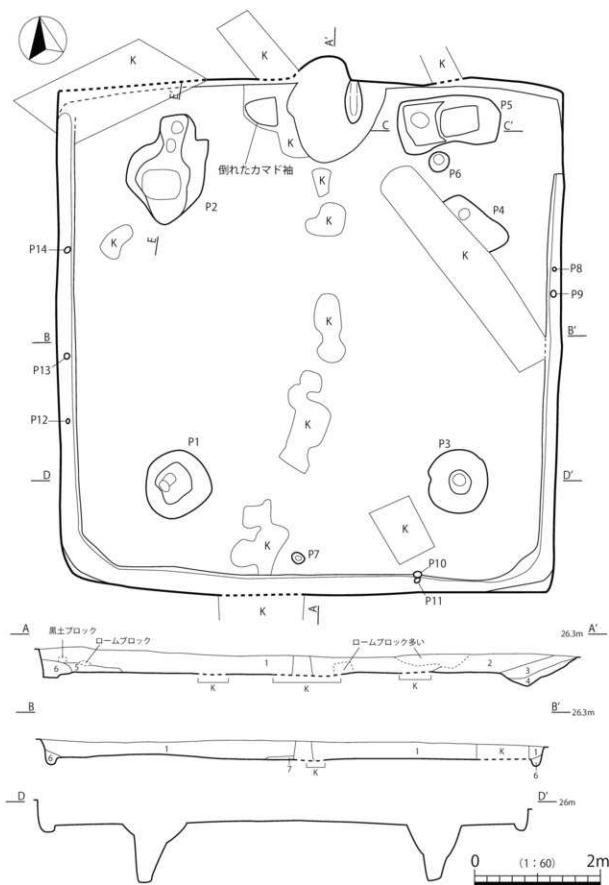
ピット P1～P4は主柱穴である。南側のP1とP3はほぼ同規模で、掘方の直径1m程度、底径は20cm程度を測り、深さは90cm程度である。P2は掘方が1.2×3.6m程度の不整形を呈するが、柱のアタリと思われる硬化面は北側に寄って検出された。硬化面までの深さは70cm程度である。P4は攪乱に切られているが、径1m程度の掘方を持つと思われ、底面までの深さは30cm程度である。P5は貯蔵穴である。0.9×1.6m程度の長方形を呈し、掘りこみが2つ重複している。右の掘りこみのほうがやや深く、左の掘りこみを切っているようにも見えるが、覆土の観察からは少なくとも埋没に時間差はなく、同時に開口していたようである。P6は貯蔵穴に隣接するピットで、直径30cmの円形を呈し深さは20cm程度である。P7は直径20cm、深さ6cm程度を測る。入口と思われる建物南辺に位置することから、梯子穴の可能性はある。P8～P14は周溝内に認められる小ピットで、土留めの横板を押さえる杭跡の可能性はある。規模はいずれも直径10cm程度、深さ2～3cm程度である。

カマド 建物北辺の中央で検出された。攪乱に切られているため依存状況は悪く、左袖は倒壊していた。壁を40cmほど北に掘りこんで構築されており、カマド全体の平面形は1.1×1.2m程度の楕円形と思われる。右袖の長さは90cm程度であり、砂混じり粘土で構成されている。

覆土 7層に分層された。主たる覆土の1層は部分的にロームブロックを多く含み、自然な堆積構造を示さないため人為的な埋め戻しの可能性がある。2層は粘土、焼土を多量に含み、貯蔵穴を充填しているもの（貯蔵穴1層）と同じ堆積物である。3層はカマドの破片と思われる砂混じり粘土を多量に含む。4層は3層よりも砂が少なく、カマドがある程度形を保っている。



第3図 調査区配置図



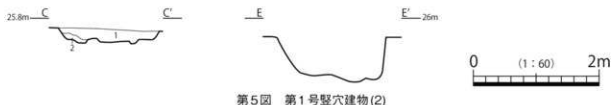
第4図 第1号竪穴建物(1)

第1号竪穴建物 (A-A'・B-B')

- 1 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂混じり粘土質シルト層。ロームブロック 20%、焼土粒子 1%、炭化物 1% 含む。
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) わずかに砂混じりシルト質粘土層。焼土粒子 15%、中～粗粒砂サイズの粘土粒 50%、炭化物をわずかに含む。
- 3 暗赤褐色 (2.5YR3/4) 粘土を多量に含む砂質シルト層。焼土 50% 含む。カマドの破片が堆積したものか、しまり弱い。
- 4 暗赤褐色 (5YR3/4) 砂質シルト層。3 層より砂が少ない。焼土 10% 含む。カマドが崩壊する前にカマド内に堆積したものか、しまり最も弱い。
- 5 黒褐色 (7.5YR3/2) わずかに砂混じり粘土質シルト層。1 層よりロームブロックが少ない。
- 6 褐色 (7.5YR4/3) 砂混じり粘土質シルト層。ロームブロック 3%、焼土わずかに含む。しまり弱い。壁溝を埋積した関東ローム層主体の三角堆積物。
- 7 黒褐色 (7.5YR2/2) こくわずかに砂混じりの有機質シルト層。植物質の物体が土壌化したもの？

貯蔵穴 (C-C')

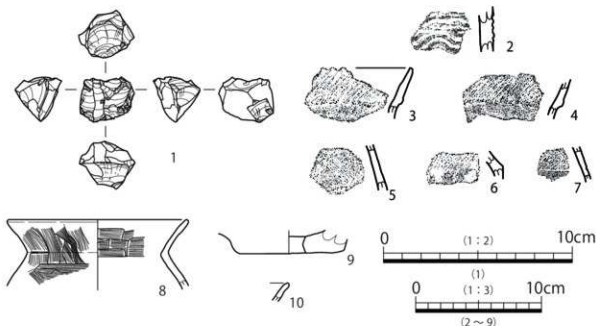
- 1 5F-1 2 層と同じ
- 2 褐色 (7.5YR4/4) こくわずかに砂まじりの粘土質シルト。焼土 5% 含む。関東ローム層が崩れたもの。



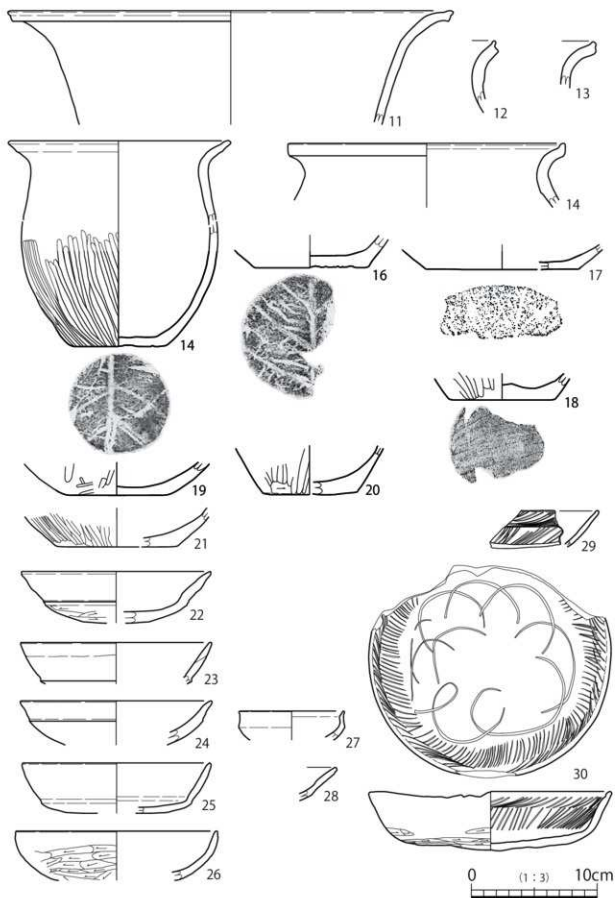
第5図 第1号竪穴建物 (2)

た時に堆積したと思われる。5層は北壁際に認められた黒みの強い堆積物で、入口施設に関連する可能性がある。6層は壁溝を充填するロームを多く含む堆積物で、いわゆる壁際の三角堆積を呈する。7層は建物中央の床面直上に認められた有機質シルトで、植物質のものが土壌化したものか。

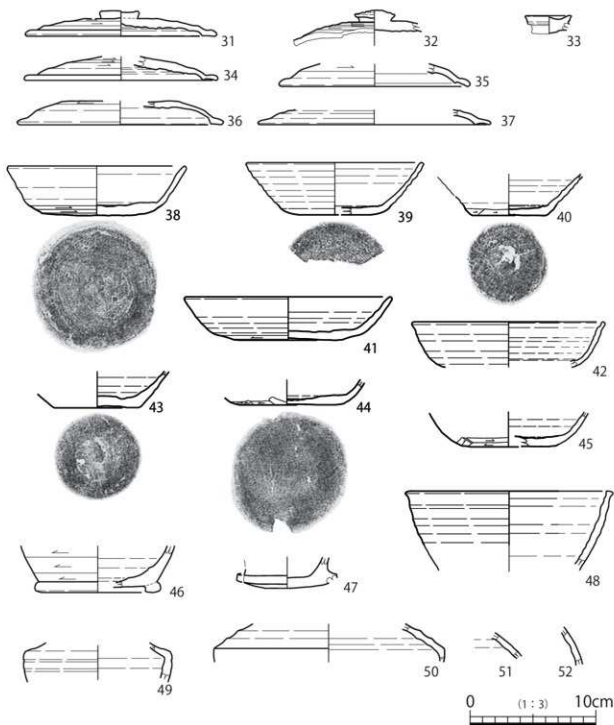
遺物 (第7~11図、第2~9表) 1~9は本竪穴建物の時期ではない遺物である。1は黒曜石製の細石刃核である。少なくとも2枚の細石刃を剥離しており、打面と剥離作業面以外は不規則な剥離がみられる。2は繊維を多量に含む縄文土器で、黒浜式であろう。3~4は付加条縄文や鋸歯状の描繪文が施される弥生土器で、後期後半であろう。8は内外面にハケ目が見られる土師器の甕で、古墳時代前期。9は瓶であり、底部中央に1孔を穿つ。古墳時代前期であ



第6図 第1号竪穴建物出土遺物 (1)



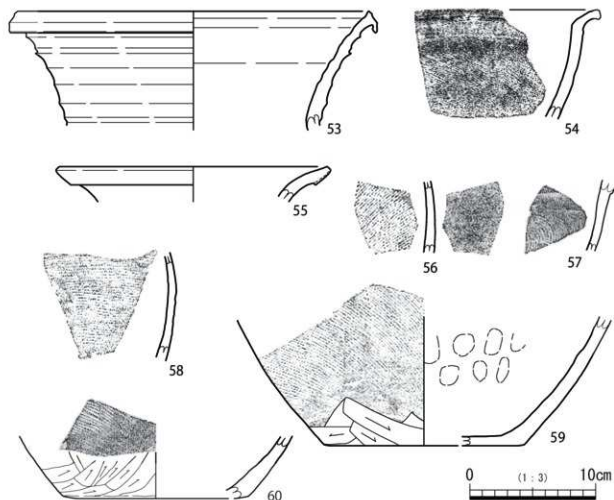
第7図 第1号豎穴建物出土遺物(2)



第8図 第1号竖穴建物出土遺物(3)

ろうか。10は内外面ともに緑～灰白色を呈する施釉陶器で、中世の古瀬戸と考えられる。

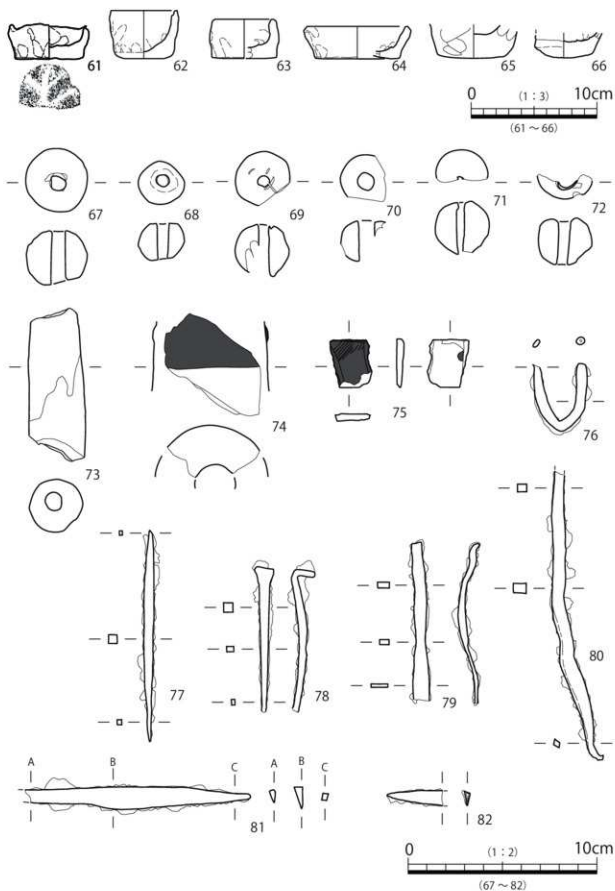
11～82は古墳時代末～奈良時代の遺物である。11～21は土師器の甕・甔である。11・13はバケツ状を呈すると考えられ、どちらの器種に当たるか判然としない。12・14～21は甕であり、体部下半への縦位ミガキや口縁部のつまみ上げなど、常総型甕の特徴を持つ個体が見られる。22～28は土師器環である。体部外面に段を持ち、段より下位にヘラ削りを施した個体が多い。なお22、23は須恵器壺(49)とともに貯蔵穴から出土している。29・30は暗文土師器環である。29は口縁部片で、見込部への施文を確認できないが、残存部に限れば30と文様構成が類似する。30は南側の周溝内から出土した。口縁部、体部に右放射状暗文、見込部



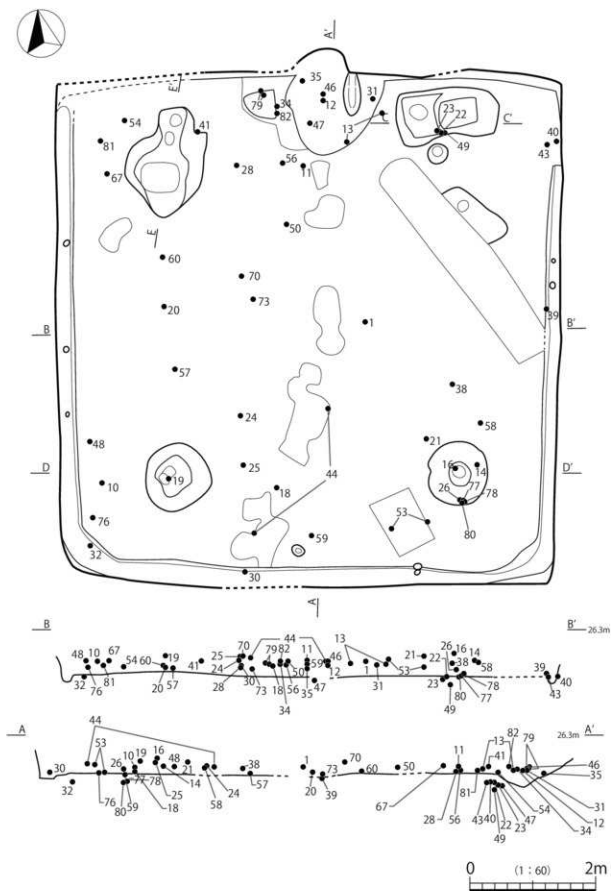
第9図 第1号竪穴建物出土遺物(4)

に時計回りの内螺旋状暗文（森2016）を有する。施文順は体部の後に口縁部・見込部となる。法量、文様構成から平城宮Ⅰ（7世紀末～8世紀初頭）と考えられる（奈良文化財研究所1976・1978）。ただし、胎土や底部外面加工の荒さ等から在地における模倣品であろう。

31～37は須恵器蓋である。口縁部が残存する31・34～37についていずれも退化したかえりがみられ、33のつまみも扁平なつくりであり、これらは一丁田段階に当たると考えられる（赤井1998）。38～45は須恵器坏である。38・39・41・42・44・45はいずれも丸底気味で、古相を呈し、これらは一丁田段階に当たる。41・42については特に器高が低く、栗山段階ともとれる個体である。40・43は底部の小型化が進んだ個体で、東の壁際、ちょうど周溝が途切れるあたりで、近接した位置から横倒しの状態で出土した。ともに器形から9世紀後半の所産であろう。46は須恵器長頸壺の底部である。切り離しが回転糸切りであり、外部からの搬入品か。47は捏ね鉢で、一般に須恵器の器種であるが本資料は土師器である。48は須恵器鉢、49は須恵器壺である。いずれも胎土から新治窯跡産と考えられる。50～52は自然釉のかかった須恵器である。50・51は壺類とみられ、精良な白色の胎土に黒色粒が混じることから、湖西産須恵器と考えられる。52は50・51に比して胎土に礫が多く、胎土・釉ともに色合いが少々



第10図 第1号竖穴建物出土遺物(5)



第11圖 第1号竖穴建物遺物出土状況

暗いため、湖西産か否かについては判断できない。53～60は須恵器壺甕類である。53は精良な胎土であり、外部からの搬入品か。56は胎土の特徴から湖西産か。55・57～60は胎土から新治窯跡産と考えられる。55は焼成が特殊で、内面に光沢のない自然釉がかかり、外面は黒く、胎土に含まれる砂礫の一部が表面に溶出し、丸みを帯びた粒になっている。57は外面に同心円の叩きが見られ、8世紀前半の所産と考えられる。61～66は手づくね土器である。全て覆土からの出土であり、住居廃絶後の祭祀行為を想定できようか。住居跡からのまとまった出土は、本跡に比して時期は上がるが、初買場遺跡第2号堅穴建物に類例がみられる（土浦市教育委員会2016）。67～72は土玉で、直径2～3cm程度の球形を呈する。73は管状土錘で両端を欠損する。74は円筒形を呈する土製品の一部で、鉄滓と思われる付着物が認められることから羽口と判断した。75は砥石の破片。76～82は鉄製品である。76は、直径4mm程度の円～楕円形の断面をもち、U字状を呈するもので、器種不明である。77・78・80はいずれも断面方形を呈し、一端が尖るもので釘と考えられる。77は両端が細くなっており、78は折り曲げによって釘の「頭」を作り出している。79は断面が扁平な方形を呈し、釘または鎌であろうか。81・82は刀子。81は切っ先を欠損しており、茎は断面方形を呈する。82は切っ先部分で、81とは別個体である。

遺物出土状況と覆土の形成過程 床面や覆土下層からの出土品としては、柱穴からまとまって出土した釘（77、78、80）や、周溝から出土した暗文土師器杯（30）、須恵器蓋（32）、杯（39）などである。これらの遺物は遺存状態がよいことと、その出土状況から堅穴建物の廃棄に伴って床面や周溝に残置されたものと考えられる。また、2層（貯蔵穴1層）の分布から、堅穴が廃棄されてカマドが崩れる際に、貯蔵穴は開口していたものとみられる。カマド崩壊に伴う堆積物である2～4層や、先述の周溝出土遺物を覆う6層は、堅穴建物廃棄後、比較的速やかに堆積した可能性がある。一方、1層はロームブロックを多く含み明瞭な堆積構造を示さないこと、床面近くで出土した細石刃核（1）が象徴するように、本堅穴建物本来の時期よりも大幅に古い遺物が含まれていることから、人為的な埋め戻し、あるいは掘乱を大きく受けた、もしくはその双方によって形成されたものと考えられる。これらのことから、堅穴建物廃棄後、建物外周に沿って堆積した覆土は、比較的埋没後擾乱が少なく当時のコンテクストを保っている一方、堅穴中央の覆土は埋没後擾乱の程度が強く、多様な時期の遺物が混在していると考えられる。

所見 壁際で出土した須恵器杯（40、43）は9世紀まで下るものの、その他の出土遺物の多くは8世紀初頭を示す。壁溝出土の30、32、39を現地性の高い遺物として評価するならば、8世紀初頭の堅穴建物と考えられる。

第2表 堂後遺跡出土遺物観察表(1)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
1	石器 細石刃核	長さ23 幅29 厚さ25	—	—	—	幅5mm程度の細石刃を2枚剥離している。石材は高原山産か。重量13.3g	
2	縄文土器 深鉢	長さ(4.0) 幅(5.4) 厚さ(1.2)	長石・雲母微量	橙	普通	繊維土器の体部片。	外面に波状の沈線6条。内面に泥和剤の繊維の痕跡。
3	弥生土器 壺	C(4.0)	長石多量、雲母微量	にぶい褐	良好	壺の口縁部片。	外面は頸部にナデ、口縁部に縄文を付す。
4	弥生土器 壺	C(3.0)	長石中量、雲母少量	黒褐	良好	くびれた頸部から口縁部が直線的に立ち上がる。	内外面横位ナデ後、口縁部外面に給条体の縄文を付す。
5	弥生土器 壺	C(3.6)	長石多量、雲母中量	明赤褐	普通	体部片。頸部に向かって直線的にすぼまる。	内外面ナデ後、外面に鋸歯形の櫛描文。より下位に縄文。
6	弥生土器 壺	C(2.2)	長石・雲母多量	内面：灰黄褐 外面：にぶい黄橙	普通	壺の口縁部片。	外面に縄文を付す。口唇部外面に圧痕文を施した後ケズリ。
7	弥生土器 不明	C(2.8)	長石多量、雲母少量	橙	普通	体部片。直線的にひらいて立ち上がる。	断面半円形の沈線1条。より下位に縄文。
8	土師器 甕	A[14.4] C(5.6)	長石少量	内面：橙 外面：黒褐	良好	体部が丸みを帯びて立ち上がり、頸部で「く」の字にくびれ、口縁部が直線的に立ち上がる。	外面はハケ目後、口縁部に横位ナデ。内面は頸部より下位にヘラナデ、上位に横位ハケ目後、口縁部に横位ナデ。
9	土師器 甕	B8.8 C(1.85)	長石多量、石英・スコリア・チャート微量	内面：オリーブ黒 外面：橙	普通	甕の底部片。中央に1孔を有する。	底部外面、体部外面にナデ。
10	古瀬戸 緑釉小皿	C(1.3)	精良	軸：灰白 外面：灰黄	良好	口縁部片。外反して口唇部に至る。	外面は回転ナデ
11	土師器 甕または甕	A[35.4] C(9.1)	長石・雲母多量	内面：にぶい橙、一部明赤褐 外面：にぶい黄橙	普通	甕または甕の口縁部片。体部はバケツ状を呈すると思われ、口縁部は強く外反する。	内外面、強く外反する部位より上位に横位ナデ。
12	土師器 甕	C(5.7)	長石・雲母多量	橙、にぶい褐	普通	断面S字状を呈する口縁部。	内面、口唇部付近に横位ナデ。
13	土師器 甕または甕	C(3.7)	長石・雲母多量	内面：にぶい黄橙 外面：橙	普通	断面S字状を呈する口縁部。	外面は横位ナデ。特に強いナデで沈線が形成される。内面は弱い横位ナデ。
14	土師器 甕	A[15.8] B7.6 C[16.65]	長石・雲母多量	内面：明赤褐 外面：にぶい黄橙、黄灰	普通	平底から丸みを帯びて立ち上がり、頸部でくびれて口縁部は外反する。	底部外面に木葉痕。外面は下縁に光沢のない徒位ミガキ、頸部より上位に横位ナデ。内面は横位ヘラナデだが、下半には指頭圧痕が残る。

第3表 堂後遺跡出土遺物観察表(2)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
15	土師器 甕	A [20.0] C (4.7)	長石・雲 母中量、 石英微量	にぶい黄橙	普通	甕の口縁部片。頸部で 外反し、口縁部が直立 気味に立ち上がる。	外面はくびれ部より上位 に横位ナデ。内面は横位 ナデ。
16	土師器 甕	B9.2 C (2.6)	長石・雲 母多量、 石英微量	内面：にぶい 黄橙 外面：黒褐	良好	平底の底部片。やや外 反気味に立ち上がる。	底部外面に木葉痕。内外 面ヘラナデ。外面は判然 としない。
17	土師器 甕	B [12.2] C (2.0)	長石・雲 母中量	内面：にぶい 黄橙 外面：黒褐	普通	平底の底部片。	底部外面に木葉痕。内面 は弱いヘラナデ。
18	土師器 甕	B [8.4] C (2.1)	長石中量、 石英・雲 母微量	内面：にぶい 黄橙 体部外面：灰 黄褐 底部外面：明 赤褐	良好	平底の底部片。	底部外面に光沢のないミ ガキ。外面は光沢のない ミガキ。内面はヘラによ る成形痕。
19	土師器 甕	B [9.0] C(2.75)	長石・雲 母多量	内面：にぶい 橙 底部外面：黒 褐 体部外面：に ぶい黄橙	普通	平底の底部片。丸みを 帯びて立ち上がる。	底部外面にミガキ。外面 は光沢のないミガキ。内 面はヘラナデ。
20	土師器 甕	B [7.6] C (3.9)	長石多量、 石英微量	にぶい黄橙 底部外面半分 のみ黒	良好	平底の底部片。直線的 に立ち上がる。	底部外面に手持ちヘラ削 り。外面はヘラ削り後従 位ミガキ。内面はヘラナ デ。
21	土師器 甕	B [9.6] C (3.1)	長石中量、 雲母少量	内面：暗オ リーブ褐 外面：褐	普通	平底の底部片。直線的 に立ち上がる。	底部外面に木葉痕。外面 は従位ミガキ。内面はヘ ラナデ。
22	土師器 環	A [15.0] C (4.1)	長石・石 英・スコ リア・雲 母微量	内面：にぶい 黄橙・黒 外面：にぶい 黄橙・褐灰	良好	体部中位に段を有する 丸底の環。わずかに外 反しながら立ち上がる。	底部外面に手持ちヘラ削 り。体部外面に横位ナデ。 内面は横位ナデ。段はナ デにより成形。
23	土師器 環	A [15.2] C (3.3)	長石少量、 石英・雲 母微量	橙・褐灰	良好	体部下位に段を有する 土師器環。やや丸みを 帯びて立ち上がる。	外面は段より下位に手持 ちヘラ削り。上位に横位 ナデ。その他部位 は横位ナデ。外面に粘土 結痕が1条残る。
24	土師器 環	A [15.2] C (3.5)	長石・雲 母微量	内面：黒 外面：褐灰	良好	有段環の体部および口 縁部片。丸みを帯びて 立ち上がり、段より上 位で外反する。	外面は段より下位に手持 ちヘラ削り。上位に横位 ナデ。内面は横位ナデ後 黒色処理。段はナデによ り成形。
25	土師器 環	A [15.0] B [12.0] C (4.0)	長石多量、 スコリア・ 雲母微量	内面：にぶい 橙・黒褐 外面：にぶい 橙・灰褐	良好	丸底の環。内外面とも 若干くびれた後肥厚 し、丸みを帯びて立ち 上がる。	底部外面に最少3単位の ヘラ削り。外面は横位ナ デ。くびれ部には特に強 いナデ。内面は横位ナデ。

第4表 堂後遺跡出土遺物観察表(3)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
26	土師器 坏	A [8.1] C (3.95)	長石少量、 石英・雲 母微量	明赤褐	良好	丸みを帯びて立ち上 がるが、口縁部付近 でわずかに外反する。	外面は横位ナデ後、下半 に手持ちヘラ削り。内面 は横位ナデ。
27	土師器 坏	A [8.4] C (2.3)	雲母微量 精良な胎 土	内面：にぶい 黄橙 外面：にぶい黄褐	良好	丸底の小型坏。丸み を帯びて立ち上がり、 稜を形成した後は外 反しながら口縁部に 至る。	内外面横位ナデ。稜より 下位に手持ちヘラ削り。
28	土師器 坏	C (3.3)	長石・雲 母多量	内面：褐灰 外面：灰黄褐	普通	有段坏の体部および 口縁部片。段より上 位で外反する。	外面は、口縁部に横位ナ デ。体部は摩耗により不 明。内面は横位ナデ。
29	土師器 坏	C (2.9)	長石中量、 スコリア 微量	内面：橙 外面：赤褐	良好	暗文を有する土師器 坏。丸みを帯びて立 ち上がる。	外面は横位ミガキ。内面 は横位ナデ後2段の暗 文。見込部に施文された かは不明。
30	土師器 坏	A192 B15.7 C4.7	長石少量	橙	良好	暗文を有する土師器 坏。丸みを帯びて立 ち上がる。	外面は底部周辺に手持ち ヘラ削り、上位に横位ミ ガキ、口縁部は横位ナデ。 内面はナデ後、暗文。体 部に施文後、口縁部、見 込部に施文。
31	須恵器 蓋	A [15.2] C2.05	雲母多量、 長石中量	内面：黄灰 外面：灰、灰白	不良	退化したかえりを有 する蓋。つまみ形状 は扁平。	外面は回転ナデ後、上位 に回転ヘラ削り。内面 に成形痕、つまみに接合痕。
32	須恵器 蓋	C (2.6)	雲母多量、 長石・ス コリア少 量	灰黄	普通	扁平なつまみを持つ 蓋。	外面は回転ナデ後、上位 に回転ヘラ削り。つまみ に接合痕。
33	須恵器 蓋	C (1.45)	雲母多量、 長石少量	外面：黄灰 内面：灰	普通	蓋のつまみ。扁平な 形態で、つまみと蓋 部の境界に沈線を1 条有する。	沈線を施した後により上 位に回転ナデ。
34	須恵器 蓋	A [15.4] C (1.9)	雲母多量、 長石中量	黄灰	普通	直線的な体部が内湾 した後強くくびれて 口縁部に至る。内面 にかえりを有する。	回転台による成形後、口 縁部を除く外面に回転ヘ ラ削り。かえりは粘土紐 の貼り付けによらない。
35	須恵器 蓋	A [15.2] C (1.8)	雲母多量、 長石微量	灰	普通	かえりを有する蓋の 口縁部片。	内外面回転ナデ後、外面 上位に回転ヘラ削り。回 転ナデで押し出される粘 土でかえりを成形か。
36	須恵器 蓋	A [16.4] C (1.9)	長石多量、 雲母微量	内面：にぶい褐、 褐灰 外面：灰黄褐、 褐灰	普通	退化したかえりを有 する蓋。	内外面回転ナデ後、頂部 外面に回転ヘラ削り。
37	須恵器 蓋	A [18.6] C (1.2)	雲母・長 石多量	灰	普通	かえりを有する蓋の 口縁部片。	内外面回転ナデ。
38	須恵器 坏	A142 B84 C3.95	雲母・長 石多量	内面：暗灰黄 外面：灰	不良	丸底気味の坏。丸み を帯びて立ち上がる 。口縁部は直線的。	内外面回転ナデ後、外 面下端に回転ヘラ削り 。その後に底部外面 への回転ヘラ削り。

第5表 堂後遺跡出土遺物観察表(4)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
39	須恵器 杯	A [14.2] B [8.5] C (4.2)	長石多量	灰	普通	平底の杯。内湾気味に立ち上がる。	底部外面は回転ヘラ削り。外面は体部に成形痕、口縁部に回転ナデ。内面は回転ナデ。
40	須恵器 杯	B6.2 C (3.3)	長石多量、 石英・雲母微量	灰白	不良	底部小型化が進んだ杯の底部。直線的に立ち上がる。	回転ヘラ切り後、複数方向の手持ちヘラ削り。内外面回転ナデ後、体部外面下端に手持ちヘラ削り。
41	須恵器 杯	A [16.5] B [11.1] C (3.45)	雲母多量、 長石少量	灰白	不良	丸底気味の杯。直線的に立ち上がる。	内外面回転ナデ後、底部外面に回転ヘラ削り。
42	須恵器 杯	A [15.4] C (3.6)	雲母多量、 長石・スコリア少量	内面：灰オリーブ 外面：オリーブ黒	普通	丸みを帯びて立ち上がり、若干反しなから口縁部に至る。	内外面とも幅の狭い成形痕。
43	須恵器 杯	B7.0 C (2.9)	雲母多量、 長石中量	灰白、灰	不良	底部小型化が進んだ杯の底部。直線的に立ち上がる。	回転ヘラ切り後、複数方向の手持ちヘラ削り。内外面回転ナデ後、摩耗により判然としないが外面下端に手持ちヘラ削り。
44	須恵器 杯	B7.6 C (2.0)	雲母多量、 長石・スコリア中量	内面：黄灰 外面：黒	不良 (酸化 雰囲気)	平底の杯。丸底杯の特徴を残し、底部と体部の境界は曖昧。丸みを帯びて立ち上がる。底部は薄い。	底部外面は複数回の平行方向への手持ちヘラ削り。外面は手持ちヘラ削り。内面は回転ナデ。
45	須恵器 杯	B [8.6] C (2.8)	雲母多量、 長石少量	灰白、にぶい 赤褐、灰黄	不良 (還元 が甘い)	平底の杯。丸みを帯びて立ち上がる。	底部外面に複数方向の手持ちヘラ削り。外面は体部下端に手持ちヘラ削り。内面に成形痕。
46	須恵器 長頸壺	B [10.0] C (3.7)	長石微量 精良な胎土	内面：灰白 外面：灰	良好	高台付杯の底部及び体部片。丸みを帯びて立ち上がる。	回転糸切り。内外面に回転ナデ後、外面に回転ヘラ削り。その後、高台を付し、接合部に回転ナデ。
47	土師器 捏ね鉢	C (2.5)	スコリア・ 雲母中量、 長石・石英微量	にぶい黄橙	不良 (酸化 雰囲気)	丸底気味の捏ね鉢底部。直線的に立ち上がると思われる。	底部外面は弱いナデ。他部位は横位ナデ。
48	須恵器 鉢	A [16.5] C (6.4)	雲母多量、 長石微量	内面：褐灰 外面：灰白	不良	丸みを帯びて立ち上がり、若干反しなから口縁部に至る。	外面は回転ナデ。内面は体部に成形痕、口縁部に回転ナデ。
49	須恵器 壺	C (2.75)	長石多量	内面：黄灰 外面：灰、灰白	良好	壺の体部片。最大径は胴部上位。	内外面肩より下位に横位のヘラナデ、上位に回転ナデ。

第6表 堂後遺跡出土遺物観察表(5)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形の特徴	技法の特徴
50	須恵器 壺	C (3.1)	黒色粒微量 精良な胎土	内面：灰白 外面：暗オリーブ	良好	短頸壺または長頸壺の肩部。	外面は肩より上位に自然軸。内面に成形痕。
51	須恵器 短頸壺か	C (1.6)	黒色粒多量、長石少量	内外面：灰白 軸：オリーブ灰	良好	外面に自然軸。	外面は回転ヘラ削りで、一部に自然軸・内面は回転ナデ。
52	須恵器 不明	C (3.5)	長石微量 精良な胎土	内面：灰 外面：灰オリーブ	良好	須恵器片。	外面に自然軸。内面に成形痕。
53	須恵器 甕	A [29.2] C (9.4)	長石微量 精良な胎土	灰白	良好	口縁部片。頸部で破損している。外反しながら立ち上がる。	内外面横位ナデ。外面の突帯状装飾2条はナデで押し出される粘土を用いて成形か。口縁部は折り返して成形。
54	須恵器 甕または瓶	C(8.7)	雲母多量、 長石少量	内面：灰白 外面：灰	不良	バケツ状を呈すると思われる。丸みを帯びて立ち上がり、頸部で外反し、口縁部に至る。	外面は、体部に斜位の叩き文、頸部・口縁部に横位ナデ。内面は体部にヘラナデを施すが指頭圧痕が残る。頸部・口縁部に横位ナデ。
55	須恵器 甕	A [21.8] C (2.8)	長石多量	内面：明黄褐、 明褐 外面：黒	良好	口縁部片。外反しながら立ち上がり、口唇部付近でわずかに内湾する。口唇部は平坦で端正。	外面は横位ナデ。口縁部は折り返して成形か。内面および口唇部端部には光沢のない自然軸。口唇部端部は面取り。
56	須恵器 甕	C (5.7)	長石・黒色粒中量 精良な胎土	灰白	良好	甕の体部片。	外面に斜位の叩き文。内面に同心円の叩き文。
57	須恵器 甕または瓶 あるいは鉢か	C (5.7)	雲母多量、 長石中量	灰白	不良	頸部片。バケツ状を呈すると思われる。	外面に同心円状の叩き文。内面は摩耗により判然としなない。頸部外面に粘土の繋ぎ目。
58	須恵器 甕または瓶	C (8.63)	長石・雲母多量	灰	2次 焼成 により 不明	甕または瓶の体部片。器厚を薄くしながら立ち上がる。	外面に横位の叩き文。内面は損耗激しく不明。
59	須恵器 甕	B [16.0] C (10.25)	長石・雲母中量	灰	良好	平底の底部片。直線的に立ち上がる。	外面は斜位の叩き文の後、下端にヘラ削り。内面は指頭圧痕が残る、より下位に斜位のナデ。
60	須恵器 甕	B [14.8] C (4.95)	長石中量	灰	良好	平底の底部片。直線的に立ち上がる。	外面は斜位の叩き文の後、下端にヘラ削り。内面は斜位のナデ。

第7表 堂後遺跡出土遺物観察表(6)

掲載 番号	種類 器種	法量	胎土	色調	焼成	器形・技法の特徴
61	土師器 手づくね土器	B5.4 C2.6	長石多量、 チャート少量	内面：褐 外面：にぶい黄褐	普通	平底でわずかに外反して立ち上がる。底部木葉痕。外面調整は指頭圧痕、内面はヘラナデを施すが指頭圧痕も残る。口縁部は雑な面取り。
62	土師器 手づくね土器	A (4.8) B (4.4) C (3.8)	長石多量、 スコリア微量	明褐	普通	平底で、おおそ直線的に立ち上がる。内外面に指頭圧痕。
63	土師器 手づくね土器	A (5.0) B (5.0) C (3.1)	長石多量	内面：褐 外面：暗灰黄	良好	平底で直線的に立ち上がる。底部外面にナデ。内外面に指頭圧痕。
64	土師器 手づくね土器	A (4.0) B (6.6) C (2.55)	長石多量	内面：明褐 外面：褐	普通	外反して立ち上がる。内外面に指頭圧痕。
65	土師器 手づくね土器	B5.4 C2.7	長石多量、 雲母微量	にぶい橙・黒褐	普通	平底の底部。内外面に指頭圧痕。
66	土師器 手づくね土器	B4.6 C (2.0)	長石多量、 チャート微量	内面：明赤褐 外面：明褐、黒褐	普通	九底の底部。内外面に指頭圧痕。外面に年度粒の接合痕が残る。
67	土製品 土鍾	長さ (3.35) 幅 (3.25) 厚さ (2.85)	長石中量、 石英微量	にぶい黄褐・褐灰	良好	球形。上下端は平坦に面取り。孔径7~8mm、重量30.3g。
68	土製品 土鍾	長さ2.25 幅2.40 厚さ2.00	長石多量	褐灰	良好	球形。上下端はケズリにより平坦。孔径5~7mm、重量10.1g。
69	土製品 土鍾	幅 (2.9) 幅 (2.4) 厚さ (2.7)	長石・スコリア中量、微細 スコリア微量	にぶい黄褐	良好	球形。穴付近に爪痕、指頭圧痕が残る。孔径4.5~5.5mm、重量18.9g。
70	土製品 土鍾	長さ (2.7) 幅 (2.4) 厚さ (2.1)	長石多量	橙	普通	球形。破損個所が多く、遺存状況が悪い。孔径9mm、重量9.0g。
71	土製品 土鍾	長さ (1.7) 幅 (2.8) 厚さ (2.8)	長石多量、 石英微量	橙	良好	球形。爪跡が残る。孔径2~5mm、重量12.4g。
72	土製品 土鍾	長さ (1.3) 幅 (2.9) 厚さ2.5	長石多量、 石英微量	にぶい黄褐	普通	球形。外面ナデだが、一部摩耗。孔径5~7mm、重量7.3g。
73	土製品 管状土鍾	長さ (3.05) 幅 (3.05) 厚さ (8.1)	長石多量	にぶい赤褐	良好	上下端で欠損する管状土鍾。表面が摩耗している。重量66.1g。
74	土製品 羽口	長さ (5.4) 幅 (5.1) 厚さ (2.8)	長石多量	内面：橙 外面：灰白、暗灰	不明	羽口の一部。実測図上版に鉄滓と思しき発泡した付着物。重量45.0g

第8表 堂後遺跡出土遺物観察表(7)

掲載番号	種類 / 器種	法量	器形・技法の特徴
75	石製品 砥石	長さ (2.52) 幅 (22) 厚さ (0.4)	表面を大きく欠損する。砥面は3面(表裏面及び上端面)確認される。重量 3.1g
76	鉄製品 U字形鉄製品	長さ 3.6 幅 0.55 厚さ 0.4	断面は円形～楕円形。重量 4.7g
77	鉄製品 釘	長さ 11.15 幅 0.52 厚さ 0.47	断面は方形を呈し、両端が細くなる。重量 10.0g
78	鉄製品 釘	長さ 7.73 幅 1.0 厚さ 0.5	断面は方形を呈し、釘頭は折り曲げ。先端はわずかに欠損。重量 10.2g
79	鉄製品 鏃または釘	長さ (8.4) 幅 1.33 厚さ 0.3	断面は扁平な方形を呈し、鏃か。重量 9.3g
80	鉄製品 釘	長さ 15.3 幅 0.81 厚さ 0.58	断面は方形を呈し、先端は曲がっている。重量 25.1g
81	鉄製品 刀子	長さ (11.92) 幅 1.21 厚さ 0.3	切っ先を欠損する。茎は断面方形。重量 15.4g
82	鉄製品 刀子	長さ 2.95 幅 0.8 厚さ 0.31	刀子の切っ先。81とは別個体。重量 1.6g

第4章 まとめ

本調査は、太陽光発電設備工事による伐根に伴い実施したものである。伐根する樹木周辺について発掘調査を行ったところ、竪穴建物1棟が検出された。

出土した暗文土師器や、新治窯跡産須恵器の編年によれば、本竪穴建物は8世紀初頭（奈良時代）に位置づけられる。市内で同時代の集落としては常名の弁才天遺跡が上げられ、やはり栗山〜一丁田段階の須恵器、暗文土師器、釘や刀子などの鉄製品の出土がみられる（土浦市遺跡調査会編2006）。弁才天遺跡の暗文土師器が在地的な文様であるのに対して、堂後遺跡の暗文土師器は胎土や調整こそ在地の特徴を持つものの、文様構成は畿内産のものとまったく同じである。このことは、本遺跡と畿内との強い結びつきを示唆する。

本遺跡が所在する烏山地区を含む土浦市城南部は、信太郡中家郷に推定されている。堂後遺跡と谷を挟んで反対側に立地する阿見町宮脇遺跡は、二重の溝に囲まれた中に礎石建物跡や掘立柱建物跡が発見されており、踏脚礎などの出土遺物からも郡衙と関わりをもつ公的な施設であったことが指摘されている。堂後遺跡は、宮脇遺跡などと合わせて奈良時代における拠点的な集落の一部を構成していたと考えられる。

引用文献

- 赤井博之1998「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究（1）～奈良・平安時代の須恵器編年を中心として～」『婆良岐考古』第20号 婆良岐考古同人会 61-109頁
- 茨城県教育庁文化課編1975『土浦市烏山遺跡群』茨城県住宅供給公社
- 茨城県教育委員会編1982『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書III』茨城県教育委員会
- 茨城県教育財団編1991『一般国道125号線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第64集 茨城県教育財団
- 茨城県教育財団編1996『主要地方道土浦竜ヶ崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第111集 茨城県教育財団
- 茨城県教育財団編2013『五蔵遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第381集 茨城県教育財団
- 茨城県教育財団編2017『五蔵遺跡2』茨城県教育財団文化財調査報告第423集 茨城県教育財団
- 宇野沢昭・磯部一洋・遠藤秀則・田口雄作・永井茂・石井武政・相模輝雄・岡重文1988『2万5千分の1 筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図』地質調査所
- 大川 清・寺村光晴編1988『烏山遺跡』土浦市教育委員会
- 形部遺跡調査会編2005『形部遺跡』土浦市教育委員会
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場編1998『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第3号 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2009『第14回企画展 よみがえる古代の信太郡』上高津貝塚ふるさと歴史の広場

- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2013『第12回特別展 古代のみち—常陸を通る東海道駅路—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 上高津貝塚ふるさと歴史の広場編2015『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』第20号 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
- 土浦市遺跡調査会編1999『東出・神出・中居遺跡』土浦市教育委員会
- 土浦市遺跡調査会編2006『弁才天遺跡・北西原遺跡（第5次調査）』土浦市教育委員会
- 土浦市教育委員会2016『初買場遺跡（第2次調査）—集合住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』土浦市教育委員会
- 土浦市史編さん委員会1973『土浦市史』土浦市役所
- 奈良文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
- 奈良文化財研究所1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』
- 有限会社日考研茨城編2008『宮脇遺跡第6次発掘調査報告書』阿見町教育委員会
- 森暢郎2016『暗文土師器の編年と規範』『縄向学研究』第4号 桜井市縄向学研究センター 51-73頁
- 三浦英樹1995『第四紀土壌研究の方法論に関する試論—特に堆積土壌を中心として—』近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会編『近堂祐弘教授退官記念論文集』帯広畜産大学畜産環境科学科土地資源利用学講座 79-94頁

写 真 图 版



第1号竪穴建物



東西セクション西側
南から



東西セクション東側
南から

PL2



南北セクション南側
東から



南北セクション北側
東から



南北セクション
カマド部分



カマド完掘状況

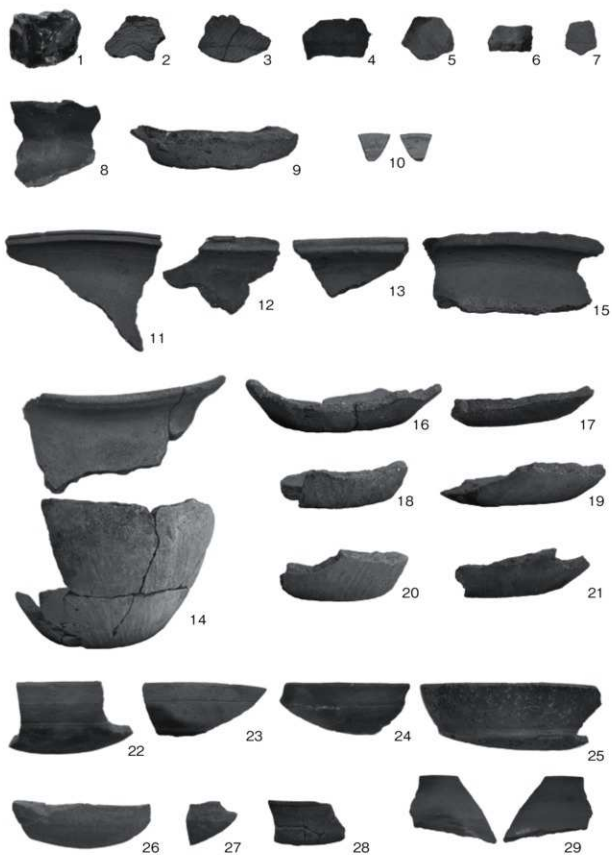


遺物出土状況 (30)
北から



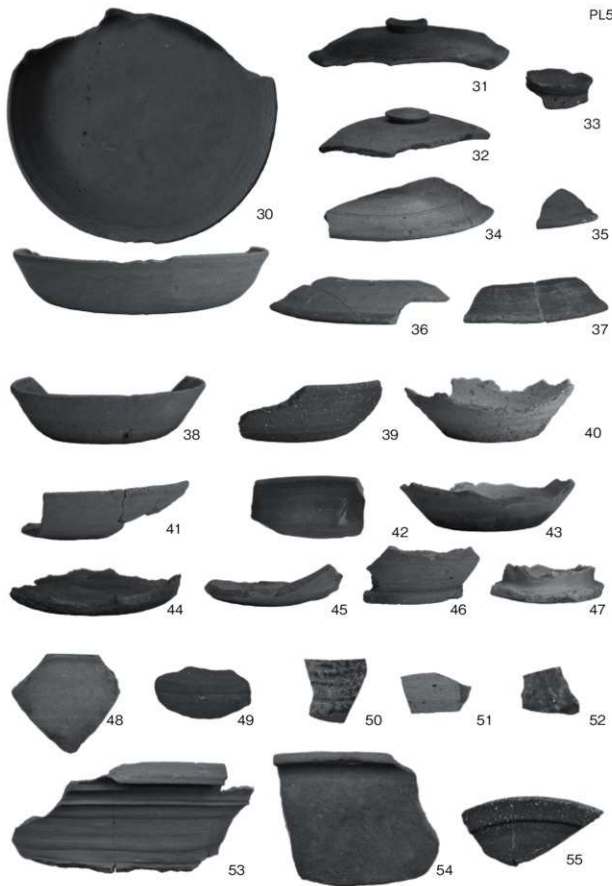
遺物出土状況 (77,78,80)
北西から

PL4



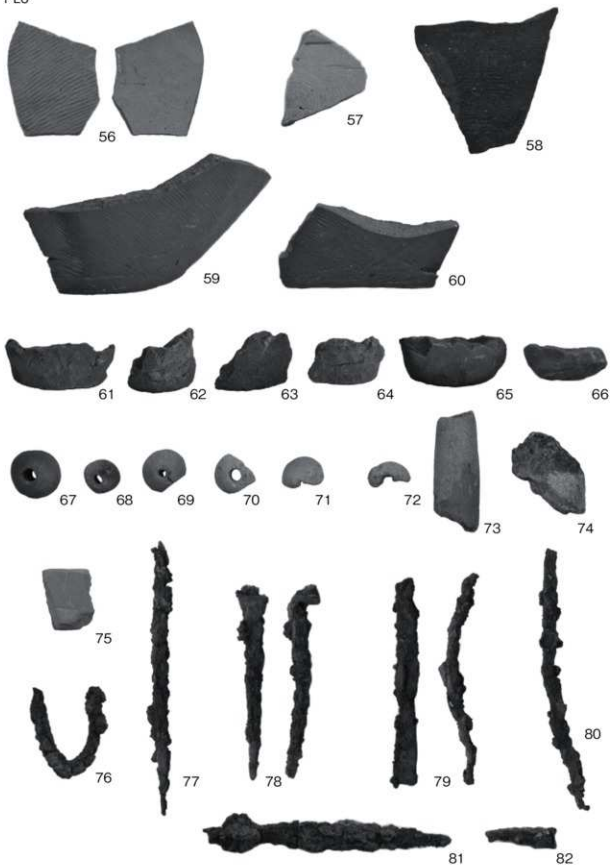
第1号竖穴建物出土遺物(1)

PL5



第1号竖穴建物出土遺物 (2)

PL6



第1号竖穴建物出土遺物 (3)

抄 録

ふりがな		どうごいせき							
書名		堂後遺跡							
副書名		太陽光発電設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編集者名		亀井 翼	著者名	亀井 翼・小屋亮太					
編集機関		上高津貝塚ふるさと歴史の広場							
所在地		〒 300-0811 茨城県土浦市上高津 1843 ℡ 029-826-7111							
発行機関		土浦市教育委員会							
所在地		〒 300-0036 茨城県土浦市大和町 9 番 2 号 ℡ 029-826-1111（代表）							
発行年月日		西暦 2021 年（令和 3 年）3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因	
		市町村	遺跡 番号						
どうご いせき 堂後遺跡	つちうら し からすやま 土浦市烏山 さんちよう め 三丁目 1894-2 外	203	036	36 度 2 分 45.58 秒	140 度 12 分 9.03 秒	2019 年 11 月 8 日～ 11 月 30 日	約 110 ㎡	太陽光 発電	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項		
堂後遺跡	集落跡	奈良時代		堅穴建物 1 軒		土師器（甕、 坏、暗文坏など）、須恵器 （蓋、坏、壺、 甕など）、土 製品（手づく ね土器、土玉、 管状土鍾、羽 口）、石器（紙 石）、鉄製品 （釘、刀子など）	1 辺 8m 程度を囲 る大型の堅穴建物 1 軒を検出した。 畿内産と同一の文 様をもつ暗文土師 器坏や、釘、刀子 などの金属器が出 土した。また、建 物跡に伴うもので はないが、細石刃 核や縄文土器、弥 生土器も出土し た。		

茨城県土浦市

堂後遺跡

—太陽光発電設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷日 令和3年3月15日

発行日 令和3年3月31日

編集 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029-826-7111

発行 土浦市教育委員会
〒300-0036 茨城県土浦市大和町9番2号
TEL 029-826-1111（代表）

印刷 株式会社 横山印刷